

目的：現在生産されている身近な衣服は、雑誌や街頭写真として多くは記録されるが、実際着用した衣服そのものが残されることは少ないと思う。退蔵衣服（家庭でしまいこみ処分に困っているもの）を収集しはじめた目的は、①身近な衣生活の記録をかたちとして残すこと、②衣生活の中にあるデザインの問題点を退蔵衣服を通して探ること、③家政学におけるデザインの出発点として身のまわりの衣生活から問題発見する体験を学ばせることがあげられる。今後継続するにあたり、今回はどのような衣生活の実態をこれらより明確にできるのか試みた結果を報告する。

方法：調査は、昭和55年12月～1月、56年12月～1月、61年8月～9月の3回にわたってそれぞれ被服学科2年次学生を対象に各自の家庭より退蔵衣服を選ばせ、その着用状況の調査用紙と共に提出させた。なお調査内容は各年検討し多少異なった。

結果：①回収数は、55年が125点、56年が89点、61年が96点の計310点であった。②本人の衣服が多いので、12～20才に入手したものが65.8%と半数以上を占め、11才以下に入手のものは10%、21才以上に入手のものが24.2%であった。③退蔵する理由は年齢で異なり急激に好みが変わったとか、イメージに合わないという理由が増えるのは10代半ばから20代初め頃であり、各自の価値観を形成する過程と考えられた。それ以降はそれら理由が減少した。④着用者の生活地域は、関東地方が56.1%と多いが他は各地にわたっているので全国の衣生活の状況のある程度考察できた。昭和30年代より年代を追っていくと、40年頃より流行の影響が各地に広まる傾向などが認められた。